

$$\int_{\text{現在}}^{\text{未来}} f(x)(\text{情報教育})(\text{外国語教育}) dx = ?$$

保 崎 則 雄

大学入学者は年々変化している。学習に対する興味もそれにともない変化する。我々は彼等の要求、必要性に対してどのような具体案を準備し、実践しているであろうか。箱ものといわれる建物から、ソフトウェアである教育内容（カリキュラム）はその変化に十分対応しているであろうか。

文部省は、現在、情報教育、福祉教育、外国語教育などの重要性を認識し、それぞれの学齢期に対応したカリキュラムを構築しつつある。小学校、中学校は既に実施段階で、さらに高等学校での《『情報』科目の必修化+いくつかの選択科目（情報教育関連）》という方向性も決定された。今後ますます機器操作のレベルを超え、情報という概念を意識した大学生が増えてくることは想像に難くない。楽しみである。

一方、幼児からの外国語教育、英語の必修化という動きも同時に見られる。これらのことをセンターの仕事に絡めて有機的に考え合わせてみると、《情報教育+外国語教育⇒ 現在～近未来の大学教育の重要な1分野》という図式が見えてくる。また、この内容は、大学教育ばかりでなく、大学経営にも大きな影響を与えるような側面でも

ある。

では、一体我々はどう対処すればいいのであろうか。3つの提案を試みる。

まず、情報教育と外国語教育の統合ということ提案する。TIP (Total Immersion Program) でも PIP (Partial Immersion Program) でも名前はいつでもいいのであるが、外国語で情報教育を行う、という発想はどうであろうか。実際、この4月より、マルチメディアラボで英作文の授業を、コンピュータの基本（ファイル管理、情報の統合、サーバークライアントの概念、著作権など）操作から必要な手紙が打てるようにまでなる、という狙いでコンピュータ初学者を対象に2ヵ月実践してみた。詳細は別途報告したいと思うが、簡単に言えば2つのことが明らかになった。一つは、英語で実践する（される）ことは、学習者にとってはかなりの刺激になるということであり、いま一つは、新しい概念を外国語で教えられることに負担を感じ、理解が思うように進まないということである。指導していて、この両側面は日々相まってと表われた。英語で実践する何か、というものの一つを情報関連科目とすることはどうであろ

---

うか。現在、授業のアンケートの形で分析している最中であり、それに応じて後期はさらに方法を改善して実践してみたい。

次に、日常的な接触ということである。Ubiquitous media literacy, ubiquitous language learning という発想である。ラボでの英語作文の課題を2ヵ月間ほぼ毎週行った結果、メディアとの接触を日常的に求める声があちこちで聞かれた。たとえば、インターネットの活用、遠隔教育、海外との同時授業／会議などがすぐにでも考えられる。これに答える方法としては、時間（時差を含めた）、空間両面での施設、人材の保証を検討し、混雑の位相をずらす工夫が考えられる。

最後に、イベントの企画、人材の育成という提

案である。主体的な行動は、学習の基本である。学習者が情報機器、学習言語を駆使した活動を保証する必要がある。Awareness week, インターネット討議などといったことが考えられる。重要なことは、学生が企画、実践、評価をし、さらに宣伝するところまで当初我々が指導することである。

以上の提案は、すぐにでも実践できることである。情報館としての図書館（このネーミングは古い！）や健康科学としての情報メディアの利用といった分野の充実とも併せて、新しい概念に基づくセンター業務を21世紀に向けて真剣に考える時期にさしかかっていると考える。